

紀元前8世紀後半、ユダのアハズ王はイスラエルとアラムとの反アッシリアの同盟に加わることを拒否し、アッシリアに支援を求めました。その結果、イスラエルはアッシリアに滅ぼされ、ユダはアッシリアの実質的な属国となりました。イザヤは、ユダは大国の軍事力に頼るのではなく、頼るべきは神さまであると語りました。2～4節の言葉はイザヤと同時代の預言者ミカによるミカ書にも殆ど同じ形で記されています。イザヤはエルサレムは決して滅びないという希望を語りますが、ミカはエルサレムの滅びを語りつつ、なお平和のメッセージを告げています。

2～3節で、イザヤは、いつの日にか、ユダの都エルサレムこそが世界の中心として高くそびえ、そこから語られるヤハウエの教えと言葉を求めて、世界中の諸国、諸民族が巡礼の旅をして流れのように集まってくるというのです。それは平和の世界です。

4節の言葉は世界平和の理想を表す言葉としてよく知られ、国連本部ビルの前「イザヤの壁」に記されています。元の言葉はヨエル書4章10節の「お前たちの鋤を剣に、鎌を槍に打ち直せ。」であったと思われます。まだ軍隊が常設されていなかった時代、敵が攻めてくると農民にこう呼びかけ、農具を武器に作り変えて戦いに臨んだのです。イザヤは、この句を逆にし、武器を捨てて平和を選び取る意志を明確に示しました。今は国々の争いが剣によって解決されているが、終りの日には平和的な調停によって解決され、今は時とエネルギーを戦いの技術を学ぶことに費やしているが、総ての能力を世界に平和と公平を打ち立てるために用いる時が来る、と語るのです。「もはや戦うことを学ばない」という言葉には平和への強い意志が見られます。

日本もかつて鋤を剣に、鎌を槍にして、アジア諸国、アメリカと戦争をしました。敗戦後に定められた日本国憲法の第9条一項の戦争放棄は諸外国の憲法にもみられますが、二項の戦力を保持しないことと交戦権の否認は世界に類を見ない斬新な規定として評価されてきました。ところで、8月12日東京新聞の朝刊一面に「第9条は幣原首相が提案 マッカーサー書簡に明記」という記事が掲載されました。「日本国憲法の成立過程で、第九条は、当時の幣原首相がGHQ側に提案したということを補強する新たな史料を堀尾東大名誉教授が国会図書館収蔵の資料から見つけた。史料が事実なら、今の憲法は戦勝国の押しつけとの根拠は弱まる」、という内容です。憲法第9条の戦争放棄の規定は、紀元前8世紀にイザヤ書に示された幻が、不思議にも、旧約聖書とはあまりなじみのない私たちの国にある形をとって、実現されたといえるかも知れません。私たち、キリスト者は、今こそ、このイザヤの幻をどう受けとめるか、問われているのではないのでしょうか。